

総合アレルギー専門医に求められる内科領域

Minimal essential internal medicine for total allergists

山口 正雄

Masao Yamaguchi

帝京大学医学部内科学講座呼吸器・アレルギー学教授

Summary

種々のアレルギー疾患の有病率が高いことに伴い、1人の患者が複数のアレルギー疾患を有することが多く、臓器別の診療では高い効率を上げにくい。また長い年月の間に、主な治療対象臓器が移り変わることも稀ではなく、ときには全身性アナフィラキシーも診療対象疾患となる。時間・手間・費用のいずれにおいても医師・患者の双方で無理・無駄が生じやすい。国民および患者が望むアレルギー専門医像としては、罹患臓器が異なるアレルギー疾患であっても適切に診断・治療が可能な総合アレルギー専門医への期待が大きい。本稿では総合アレルギー専門医にとって必要とされる内科領域の疾患について概説する。

Key words

内科疾患, 喘息, アナフィラキシー, アレルゲン免疫療法, 総合アレルギー専門医

はじめに

アレルギー疾患の有病率は高く、国民病と称されるほどとなっている。アレルギー性鼻炎・花粉症は特に頻度が高く、筆者の勤務先の学生に実習の度に尋ねてみると半数近くが有していることに驚かされる。アレルギー疾患は乳幼児から高齢者まで全年齢にわたって罹患がみられ、たとえ高齢であっても新規発症が起こりうる。また、1人の患者が複数臓器のアレルギー疾患に罹患していることも多い。さらに近年は、茶のしずく®石鹼により小麦蛋白に感作された女性が食物依存性運動誘発アナフィラキシーを発症したり、ハンノキやシラカバ花粉に感作された患者がキウイやモモ、マンゴーなどを摂取して口腔アレルギー症候群を発症し、ときにはアナフィラキシーに至るといったように¹⁾、感作とは異なる臓器に症状が出現し、さらには全身症状を生ずるといった場面が増加しており、1臓器だけを診療する姿勢では太刀打ちできない。小児から成人に成長していくことに伴う小児科→内科あるいは各臓器専門科への移行のほかにも、複数の疾患のうち特に治療を要する疾